

すべき術式と考えられた。

44. 変形性股関節症における疼痛発生部位の検討

中村順一, 老沼和弘, 徳永 誠
米田みのり, 鈴木千穂, 高森尉之
大井利夫 (上都賀総合)

1999年4月～2003年8月に当院で施行した人工股関節置換術は87例94関節であり, 変形性股関節症49例55関節における術前疼痛発生部位は腰部11%, 股関節周囲91% (鼠径部87%・殿部38%・大転子部15%), 大腿前面16%, 膝周囲22%であった (複数解答可)。変形性股関節症の診断は92.7%が初診時になされたが, 7.3%で平均14.5ヶ月と著しく診断が遅れ, 膝痛を訴える症例で診断までの期間が有意に長かった。

45. Bipolar型人工骨頭置換術後にbearing insert破損によりinner headの脱臼をきたした1例

染谷幸男, 西能 竈, 堂後隆彦
(西能病院)

Self centering機能を有するbipolar型人工骨頭置換術後にbearing insert破損によりinner headの脱臼をきたした1例を経験した。症例は, 81歳女性。人工骨頭置換術後13年にて, 草刈り中, 立ち上がる時, 股関節がグキッとした感じがあり, inner headの脱臼をきたした。脱臼の発生機序として, self centering機能不全とポリエチレン辺縁の磨耗部におけるlong neckスカート部位とのてこ作用と考えられた。

46. 近交系マウスを用いた変形性関節症(OA)誘発モデル作成の試み

田原正道 (千大)

種々の近交系マウス間で関節症性変化の進行に差異があるかを調べるため, C57/B6, CBA, DBA/2マウス膝関節の膝蓋腱及び内外側副靭帯を切離し, OAモデルの作成を試みた。切離後4-8週間より各マウスとも関節内前方に石灰化を認め, 関節拘縮をきたすため, 軟X線撮影での大腿脛骨関節の詳細な評価は困難であった。切離後24週の組織学的評価では, 各マウス間で関節症性変化の差異に一定の傾向を認めなかった。

47. 椎間板の炎症刺激は神経線維の発芽(sprouting)を促進する

青木保親, 高橋和久, 大鳥精司
男澤朝行, 齋藤朋子, 銅冶英雄
(千大)
高橋 弦 (千葉市療育センター)

神経発芽のマーカーであるGAP-43に対する免疫染色を行うことにより, 椎間板の炎症が神経線維の発芽に関係しているかを調べた。結果, 椎間板に炎症惹起物質であるCFAを投与したラットでは生理食塩水を投与した群と比べ, 椎間板を支配するDRGニューロンや椎間板内の神経線維におけるGAP-43の発現が増加していた。これより椎間板で炎症が起こると, 椎間板内部で神経線維の発芽が起きている可能性が示唆された。

48. ミューオピオイド受容体ノックアウトマウスにおけるモルヒネの鎮痛効果

山田寛明 (千大院, 同・自律機能生理学)
下山恵美 (同・自律機能生理学)
曾根一郎 (東北大・神経生物学分野)

μ オピオイド受容体 (OR) ノックアウト (KO) マウスを使用し, 脊髄レベルでのモルヒネの鎮痛効果における μ ORの関与について検討した。 μ KOマウスではモルヒネは鎮痛効果がないとされていたが, 脊髄投与により鎮痛効果をもたらすことが示された。その効果は κ ORを介する作用であり, κ ORは μ ORと独立して鎮痛効果をもたらすと考えられた。これに対し δ ORの鎮痛効果には μ ORが必須であると考えられた。

49. 低エネルギー体外衝撃波の除痛メカニズム: 複数照射の効果

高橋憲正, 大鳥精司, 村田 亮
落合信靖, 高橋謙二, 和田佑一
(千大)
西須 孝 (千葉県こども)

体外衝撃波療法の除痛メカニズムとして, 局所の神経終末や後根神経節で疼痛に関与する神経伝達物質を減少させるという報告がある。体外衝撃波を用いた腱付着部炎の治療において適切な照射回数を定めるため, 体外衝撃波を1回当てた群と2回当てた群の神経終末に対する影響を免疫組織化学的に比較検討した。衝撃波を2回照射することにより神経終末の再生が14日以上延長した。2回目の照射は神経の再生を阻害することが推察された。